

子供の育成における人と技術

1. はじめに

最近、継続教育や市民啓発養育や地域教育など教育システムが整備されて、各地域や各学校で子供教育が花盛りである。その一方では、この世の中、子どもの取り巻く環境がきびしく、受験競争は言うに及ばず子供受難の時代といつても過言ではない。そこで、国際的には「子供権利条約をベースに抜本的な対策を」と考えたり、身近に健全な青少年が育成できるのかを考えたり、種々の取り組みがなされるようになってきた。にもかかわらず、今の枠組みの中からのものからなかなか明るい展望が開けないようにも見える。

こうしたなか、私は、子供環境学会の設立大会が2004年5月にあったので、たまたまそこに参加してみると、それこそおかしなことが散在し、大いに考えさせられた。そこでは、大人の子供へのかかわりについて、人間としてのコミュニケーションのものと、技術支援のものについて我らのスタンスを問うものであった。こうした問題へのアプローチにより子供の健全な育成について論じてみることにした。

2. 子供環境学会のようす

子供の教育については、家庭教育が十分できないとして学校教育に期待することが多い昨今、家庭教育や地域教育の復権が叫ばれている。また人とのかかわりもまた検討を必要としている。こうしたことを対象として研究をまず行おうとのことで学会が設立された。当初は技術の人間が集って施設やシステムについて守備範囲をきめることにしていたが、いざ蓋をあけてみると、保育士に幼稚園教師に地域のボランティア団体の方などが半数ちかく占めた。子供に関しては子供学会や保育学会など種々あるが、技術畠とのリンクしたものがこれまでなかつただけに大いに期待されていたということになる。だからこそ、今の世相や技術のスタンスが子供環境にどう向き合おうとしているかが端的に把握できるといつても過言でなかつた。

会場には、自然派のボランティア団体がいくつもブースでプレゼンやコミュニケーションの場をつくっていた。また、子供の遊び用品や造形教育に加えて、映像視覚刺激が子供に悪影響とか自動車ノイーといったブースもあり、技術推進のブースもあった。沢山の子供が子供向けの各ブースで遊んでいた。

3. 技術と子供

3. 1 ロボットと子供

技術推進の唯一のブースでソニーロボットのアイボ君のようなロボットを出品されていた方がいた。不思議なことか当然のことか、子供たちは見向きもしていなかった。自然派のブースのところで大いに遊ぶ子供達を見ながら担当の方は、周辺が「自然派のコミュニティを大切に」を訴える出品ブースであったため、場違いだったといって嘆

いていた。このことを会場に来ていたその会社の顧問(自然と技術の共存をめざすことを心情とされているような人)にどんな発言するか期待して話をした。彼は「だからさせたのだ」と。しかしその割にはブース担当者に目立った指示も何もしていないように見受けられた。ともあれもう少し話を聞こうと担当者の彼のところに行って、「どれどれパンフレット見せて」といってパンフを見たらびっくり。一人ぼっちの君にアイボ君と遊ぼう。そうしたシチュエーションで両親が楽しそうに見ているというパンフ。

さっそく、「こうしたことに何か違和感を持ちませんか」と尋ねたところ、「さしたることを思わない。」「こうした状況がいいといえますか、ロボットでなくても兄弟や友人とまず遊ぶのでは」、と話をしているうちにやっと事の意味を理解いただいた。

そこで次に彼に「ではあなたはどうするのか考えたら」と言ってその場を後にした。しばらくして戻って見ると、彼は(どこからかで借りてきた)細長い風船をアイボ君の頭に巻いていたら、やっぱり子供が寄ってきた。技術者がはじめて働けば働くほど望遠鏡的視野となりがちであり、だからこそ彼らに「彼の肩を叩いてそこの道違う、ちょっとこっちではないの」と声をかけることの必要を痛感する次第であった。どれだけの方が種々コミュニケーションされているか多少なりとも不安でもあった。

3. 2 ゲームと子供

(本会場での)子供の遊びといえば自然やコミュニケーションが主となり、高度技術があまり入ってこない。でも今後はまったく入らないのであろうか。現にTVゲームや何やらは子供の世界に入り込んできている。ふしぎなことに、私の勤務する学校ではコンピュータ学科学生の多くは大好きというのに対して、建築やデザインの学生はTVゲーム嫌いの学生がほとんどであり、会話の方が楽しいという。もちろん最近は、携帯電話が普及するにつれてそうしたメカによる遊びを楽しんでいる学生がどの学科を問わず多くなってきた。今後は、自然を大事にしようと発想する土壤がどれだけ維持していくのか。技術が妙におせつかないしないでいただきたいというようなことが多くなるようである。

4. 大人と子供

4. 1 子供と親

小学校の先生が父母たちに向かってもっと子供と一緒に遊んでやってほしいという。親が子供に关心を向げずもっと家庭団欒といったところからの声なのであろう。でもちょっとまって。親が子供と一緒に遊べるのであろうか。それも必要だが、本当にして欲しいのは子供は子供どうして遊ぶことである。以前に比べたら、子供は外へ出かけたり、集団で遊んだりしなくなっている。TVゲームのように、一人遊びが可能となってきたからである。

ここから、論議をすべきと思っている。

4. 2 子供向けの教室

最近、子供を対象としていわゆる大人の各種専門グループが小学校や地域に出かけ、建築を教えたり、工作を教えたり、などなど盛んである。早い時期から、専門性に触れるとか、目的意識の育成といったことが重要とのことであり、これを主張するほとんどの方は、子供に新しい芽を植え付けたとして成果を強調している。でもそんなことが本当にその子供たちにとって必要だったのであろうか。無意味と言っているわけではない。もっとほかの素養が身に付けるべきではないのかといっているのである。子供が健全に成長することこそ肝心なことである。

こうしたことについて、最近の大学院生が理解していたことには驚きを持った。子供の遊びに大人はおろか学生でも入っていってはならないもの。と主張していた。彼女は遠巻きに子供を観察し、理屈を研究しているとのこと。なお、「大人の考えた子供用のメニュー、いつも大人が評価していて意味なし。子供の反応をしりたい、子供がどう思っているのかを。」、なんという健康な発想のスタンスは大事にしたいものである。

4. 3 何を目的とする独創性教育

よく創造教室を街中でたまに見かけるが、創造そのものを訓練によって形成させようという趣旨のものである。生兵法怪我のもとといいたい。

独創性や個性というが、そうしたことは現在呼ばれている割には、実態が伴っていない。とくに滑稽なのは、独創性や個性といっている人(会社のトップや管理職の方々)がまったくそうしたことの縁のない人である。本来、独創性はごく普通のことをしっかりとやって初めて次に創意工夫のめが芽生えるのであり、平生のことを生半可にしかやってなくて何で独創性が芽生えるのであろうか。独創性育成の訓練はお門違いといいたい。

4. 4 子供への視線

大人が子供と一緒に遊ぶことはあってもそれだけではだめであり、子供は本来子供どうしで遊ばせるべきである。よく大人は大人の視線で子供は子供の視線で、それが子供の人格を認めるということである。大人は子供の目線に立ってというが、大人と子供の違いは歴然でありあわせる必要がないのである。大人は子供になれないし、子供は大人の視線を感じながら大きくなっていくのである。家においても、ドアノブは大人用であり、机は大人用である。そうしたスケール観で自分達のスケールをはぐくんでいき次第に大人になっていくのである。

我が友人は子供教育でよく講演を頼まれるという。そこでは自分の子供と向き合ってきた話をしたという。絵空事ではなく理念講釈でもなくアリアリティの富んだ話だけに聴衆は大いに感動を得たという。また、子供をとにかくあそばせることが大事。遊びが日常の営みである子供の世界。親達がクレームを寄せてきてひとつひとつ丁寧に説明したと言っていた。私も同意見である。その後の話は略。

5. 生活環境

5. 1 都市での生活

都市化の中で子供はどう生活していくのか、都市化というよりも高度技術社会での生活といった方がいいのかもしれない。技術が子供の生活空間のみならず子供としての人格形成の中にも関与し出していること自体が問題である。その点から遊びという生活の営みが変質してきている。警告する方も多い。

事例(学会データより) ; 高層住宅の上部階の子供は外へは遊びに行かない。小さい子供と時にも母親は水筒をもつてまるで多少ピクニックの感じで外の公園にでかけるという。もちろん回数は減る。こうしたときにも、技術は、低層化を進めようというのと、いや高層のときにでも何か改善として、中間階にポケットパークをつくってみるとか、虚像の世界を利用するとかアイデアの実現を後押ししている。何のことはない、低層化をどう実現すべきか、そのための周辺の計画などを考えたほうがいいのに。ついでながらいうと、技術は進化する方向を是認して後押しすることが多いが、もう少し枠を超えたところで知恵を絞ってみるのもいいのに。(ユビキタス社会を積極的に受け入れる賛成派は1/3、反対派は2/3、これは建築研究者のなかでのデータであり、一般の世界の方々では賛成派はもっと増えている。参考まで)

5. 2 バランス感覚

今の大人は不自由さを知つて自由を、不快さを知つて快さを求めている。これに対して子供は、不自由や不快さを(あまり)知らず、ただ一方のみを知っている。もちろん、不自由さや不快さは時代と共にかわっていくべきものであるが、あまりにも対立二極から一極といいういちスタンスのみに偏っている。

6. 疑問なこと

いくつか思うことを列挙する。

- ・自然派的な教育を受けた子供が将来大人になったときに、その効果はどう現れているのか。彼らの子供に対してもしっかりと教育していくのか。あるいは、そんな心意気を忘れさせて変わってしまうのか。変わらないでほしい。
- ・そうした教育を受けた子供と受けなかった子供の間に溝のようなものができないことはないのか。出来ないで欲しい。
- ・まとめいえば、子供がどのようにして健全に大人になるか。

7. まとめ

ではこのような時期に我ら何をなすべきか。あたりまえのことだが、(1)子供の世界を親が知る。(2)親と子のコミュニケーションを大事に。(3)技術の子供への関わりをよく考える。

今後の子供社会の構成について:結論はひとつ。子供は親を見て育つので、親が親らしく大人は大人らしく振舞うことこそ肝心であり、変な理屈や理論立てはまったく不要といいたい。ごく自然に、なすがままに。とはいえ、そんなことをしたくてもできないところに、大人環境の改善が求められているともいえる。